

広島県福山市鞆町「仙酔島高射砲台跡」の基礎的研究

澤 田 結 基 八 幡 浩 二 牧 田 幸 文

要旨

広島県福山市の「鞆の浦」は、歴史・文化・観光の面で広く国内外に知られている。鞆の浦の対岸に浮かぶ仙酔島は、「鞆公園」(名勝)の一部とともに、「瀬戸内海国立公園」内にある優れた自然の風景地である。そうした風光明媚な仙酔島ではあるが、アジア太平洋戦争時には、砲台が設置されていたという負の歴史があったことが、戦後の手記や聞き取り調査などから僅かに窺い知ることができる。しかしながら、これまでその実態はもちろんのこと、具体的な設置場所についてさえ、明らかでなかった。

そこで今回、島内の現地踏査を実施したところ、高射砲台跡、及び関連施設が設置されたと考えられる造成面や痕跡(石積1基・凹地4基)が確認できたことにより、地形測量を行った。また併せて実施した、戦後に島内で在住されていた方からの聞き取り調査からも、測量を実施したエリアに砲台が構築されていたとの貴重な証言を得ることができたことから、とりあえずは仙酔島における高射砲台跡を特定することができたといえよう。しかし、その一方で不明な点もかなり多く、現状では推定の域を出ないのもまた事実である。今後の考古学的な調査に期待したい。

なお、本稿では今回検出された造成面や痕跡を「仙酔島高射砲台跡」と仮称することとする。

キーワード：広島県福山市鞆町、仙酔島、戦争遺跡、高射砲台跡、測量調査、聞き取り調査

1. はじめに一調査に至る経緯と目的一

広島県福山市鞆町は、福山市中心部から南方へ約15kmに位置し、一般的に「鞆の浦」として、歴史・文化・観光の面で広く国内外に知られている。鞆の浦の対岸東約0.3kmに浮かぶ仙酔島は、周囲約6km、面積0.92km²の(宿泊所はあるが)無人島で、1925年(大正14)には「鞆公園」の一部として、名勝の指定を受けるとともに、1931年(昭和6)に制定された「国立公園法」に基づいて、最初に指定された「瀬戸内海国立公園」内にある優れた自然の風景地である。

そうした風光明媚な仙酔島ではあるが、アジア太平洋戦争時には、高射砲台が設置されていたという負の歴史があったことが、以下の戦後の手記などから僅かに窺い知ることができる。また、その他にも

聞き取り調査などから記録されたものがある(福山市人権平和資料館編 2005など)。

ここでは①後藤三雄氏(当時：陸軍船舶部隊)による「私の軍隊生活の思い出より」(平和祈念事業特別基金編 1992)と、②上野治通氏(当時：暁部隊船砲一教育隊)の「証言 その七」(福山空襲を記録する会編 1985)という二点の手記を以下に紹介しておきたい(下線部筆者)。

- ①「・・・東京空襲・・・(前略)鞆の仙酔島に高射砲陣地をつくり、瀬戸内海で鞆港に避難してくる船舶の援護をすることになった。中隊内で要地高射砲陣地を知っているのは自分だけだったので、陣地構築を命じられた。国立公園内のとくに名勝の地、本来ならば松の枝を折る

ことも許されない筈だが、太い松の木を惜し気もなく切り倒し掩体の枠組みに使い、ダイナマイトを使って岩をくだいて壕を掘り、高射砲四門、測高機、航速測定機、等掩体陣地をつくった。設置する高射砲は野戦高射砲の脚がなく、船載用の橋礎をつけるので深く掘らなければならず水準を出すのに苦労したものだった。(後略)・・・
—吉備津丸乗船・・・」

- ②「あの頃、私は船砲教育隊の隊長として、四百人近い兵隊の教育と健康をかね、三菱あとの兵舎で訓練をしていました。しかし、間もなく、ここは環境上よくないとのことで、鞆町の仙酔島へ派遣されました。したがって、八月八日は、仙酔島でいち早く敵機を発見、直ちに連隊本部へ報告、また、隊員にはそれぞれの部署へつかせました。来襲したB29に対し、高射砲で撃ちましたが、効果はなかったようです。福山市は相当広い部分にあたって真赤にそまっており、被害甚大だと思いました。」

まず、①の手記によれば、仙酔島に高射砲が設

置された時期については、1944年（昭和19）6月にアメリカ軍がサイパン島を占領し、B29の前線基地が建設されて以後に同爆撃機による本土空襲が本格的に始まった同年11月24日の「東京空襲」から、翌1945年（昭和20）1月3日にマニラで損傷した陸軍特殊船「吉備津丸」が三菱造船神戸造船所で修理が完了した同年7月までの間に比定されるとともに、高射砲陣地は高射砲四門、測高機、航速測定機などで構成されていたことが窺い知れる。また、②の手記からは、1945年（昭和20）8月8日の福山空襲時には、仙酔島には既に高射砲台が設置され、運用されていたことがわかる。さらに、両手記から仙酔島砲台は、その設置から運用まで陸軍船舶部隊（通称「暁部隊」）が関与していたことがわかる。とはいえ、実際には両手記にみられるような砲台跡に関して、現在の仙酔島内には何一つその情報はなく、これまで具体的な痕跡すら確認することはできない状況にあった。

そうした中で、今回改めて仙酔島で現地踏査を行ったところ、島の南西に位置する「鳥ノ口岬展望台」を含む周辺で（図1）、高射砲台跡、及び関連施設が

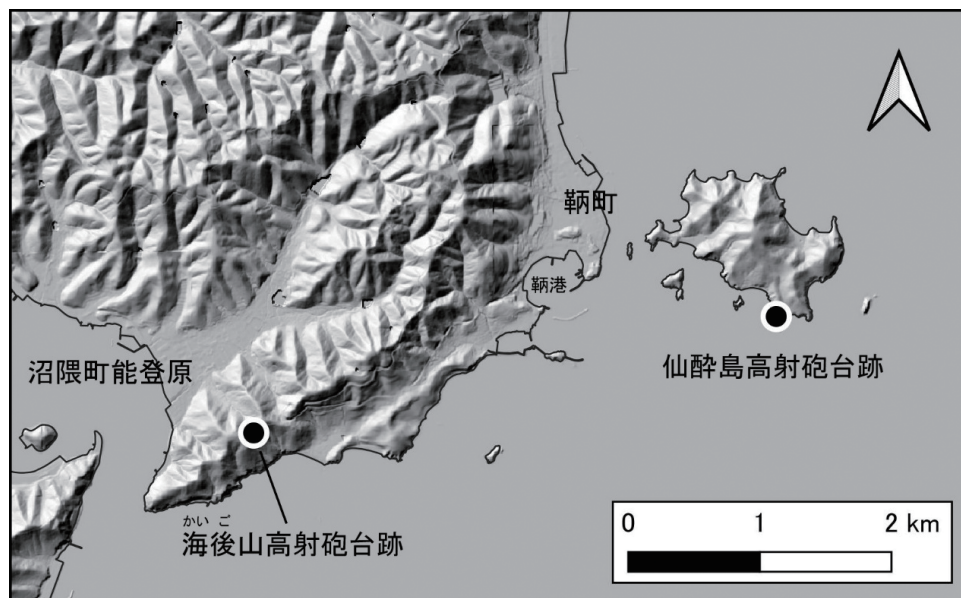


図1 仙酔島高射砲台跡の位置

※陰影図には基盤地図情報数値標高モデル（5mメッシュ）を使用した。

設置された可能性が高いと考えられる造成面や痕跡（石積や凹地）を幾つか確認することできた。そこで、「瀬戸内海国立公園」所管する環境省（中国四国地方環境事務所）への届出・申請を経た後、地形測量を行うこととした。本研究では、地形測量に加えて地域住民に対するインタビュー調査を実施し、仙酔島の造成面や痕跡が高射砲陣地の遺構であることを確認することを目的とする。

なお、本稿では今回検出した造成面や痕跡を「仙酔島高射砲台跡」と仮称することとする。また、「鳥ノ口」は、他の文献で「鳥ノ口」と表現される場合もあるが、本研究では国土地理院1:25000地形図の表記に従い、鳥ノ口と表記する。

現地調査については、福山市立大学 都市経営学部教員の澤田結基・八幡浩二・牧田幸文を中心に、安部沙優菜（八幡ゼミ2年）・宇都明奈（牧田ゼミ2年）・下江美砂（八幡ゼミ2年）・吉田智紀（八幡ゼミ2年）・和田直幹（澤田ゼミ2年）の参加を得て、2024年3月7日（木）に調査範囲の清掃作業、2024年3月11日（月）に清掃作業、及び測量を行った。

2. 福山地域の戦争遺跡

戦争遺跡（戦跡）とは、一般に「近代以降の日本の国内・対外（侵略）戦争とその遂行過程で形成された遺跡」（十菱・菊池編 2002）や、「近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内国外で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のこと」（戦争遺跡保存全国ネットワーク編 2004）といった定義がなされている。また、多岐にわたる戦争遺跡については、①政治・行政関係（陸軍省・海軍省などの中央官衙、師団司令部・連隊本部などの地方官衙、陸軍病院、陸軍学校、研究所など.）、②軍事・防衛関係（要塞（堡塁砲台）、軍港、高射砲陣地、陸海軍の飛行場、掩体壕、陸軍演習場、練兵場、試射場、通信所、監視哨、洞窟陣地、特攻隊基地、待避壕など.）、③生産関係（陸軍造兵廠、飛行機製作所などの軍需工場、経済統制を受けた工場、地下工場など.）、④戦闘地・戦場関係（硫黄島、沖縄諸島などの戦闘が行

われた地域、地点。東京・大阪・名古屋などに代表される空襲被災地、広島長崎の被爆地も広義の戦場として含む.）、⑤居住地関係（外国人強制連行労働者居住地、俘虜収容所、防空壕など.）、⑥埋葬関係（陸軍墓地、海軍墓地、捕虜墓地など.）、⑦交通関係（軍用鉄道軌道、軍用道路など.）、⑧その他（飛行機の墜落跡、奉安殿など）、といった、その内容や性格から8つの分類案が提示されており（菊池 2015）、本稿で対象とする「仙酔島砲台」は、②の軍事・防衛関係に含まれる。

戦争遺跡をめぐるのは、1975年（昭和50）頃以降、各地で戦争体験や空襲を記録する運動が始まったことを契機とし、徐々に戦争遺跡の調査や保存運動が学校や市民団体を中心に展開されるようになった。また、1984年（昭和59）には沖縄県の當眞一によって、沖縄戦の記録として壕の考古学的調査、及び遺留品を資料として、その実相を明らかにする上で、その有効性を認めた「戦跡考古学のすすめ」が提唱された（當眞 1984）。

行政的な動向としては、1990年（平成2）には沖縄県島尻郡南風原町所在の「沖縄陸軍病院南風原壕群」が戦争遺跡としては日本初の町史跡に指定された。また、広島県広島市所在の「原爆ドーム（旧広島産業奨励館）」が1995年（平成7）に国史跡に指定され、翌1996年（平成8）には、厳島神社とともに世界遺産に登録された。そして、1996年（平成8）度からは、文化庁記念物課の主導で、近代遺跡の全国調査が着手された。また、学界の動向としては、日本考古学協会1998年度沖縄大会の第5分科会「戦争・戦跡の考古学」で研究発表が行われ、学界においても戦争・戦跡考古学を認定し、日本考古学が近・現代をも対象とすることが明示されたといえよう（日本考古学協会沖縄大会実行委員会1998）。

一方で、文化庁からは「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」（平成10年9月29日付け庁保記念第75号 文化庁次長から各都道府県教育長宛て通知）が示された。そこでは埋蔵文化財として取り扱う範囲の原則として、「①おおむね中世までに属する遺跡は、原則として対象とすること。②近世に属する遺跡については、地域において必要なものを

対象とすることができること。③近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること。」とあり、埋蔵文化財としての近世・近代遺跡の判断基準が自治体によってまちまちで、大きく異なるという状況であった。そうした曖昧模糊な状況下、近年における一般社団法人 日本考古学協会（埋蔵文化財保護対策委員会）による近世・近代遺跡をめぐる保存に関する声明、及び要望書の提出が行われたものを挙げてみても、「杵築市杵築城遺跡（大分県杵築市）」、「長崎市小島養生所関連遺構（長崎県長崎市）」、「長崎県庁跡地に所在する遺跡（長崎県長崎市）」、「いわき市平城跡（福島県いわき市）」、「高輪築堤跡（東京都港区）」、「国史跡徳島城跡隣接地（徳島県徳島市）」、「大社基地遺跡群（島根県出雲市）」、「広島城跡（サッカースタジアム建設予定地）における遺跡（広島県広島市）」、「南あわじ市門崎砲台跡（兵庫県南あわじ市）」、「旧門司駅関連施設遺構（福岡県北九州市）」、「鴨川市及び南房総市に所在する嶺岡牧（千葉県鴨川市・同県南房総市）」など、その事案は枚挙にいとまがない。

このような事態を踏まえてか、文化庁は2024年（令和6）8月16日に「近世・近代の埋蔵文化財保護について（報告）」を公表し、これまで曖昧であった近世・近代の埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する基準が新たに示された。本通知に関して、近世以降の遺跡をめぐる護基準が示されたことは大いに評価できるものの、旧城下町など近世以降の遺跡を多く抱える自治体の負担（時間・予算）が懸念され、人口減少化が進行する中で、今後の動向を注視することが必要であろう。

本稿で対象とする「戦争遺跡」については、戦争体験者が高齢化を迎え、やがてはゼロになるという状況の中、戦争を知らない世代にとっては、その歴史に触れ、記憶を語り継ぐ上でも、極めて重要な歴史遺産であり、遺跡の調査・研究はもちろんのこと、その保存・整備に向けた取り組みが早急に望まれるところである。

ところで、福山地域の戦争遺跡を紹介したものとしては、人権の尊重・確立と恒久平和の実現、及び1945年（昭和20）8月8日の福山空襲の実相を後

世に伝えることを目的として、1994年8月30日に開館した福山市人権平和資料館によって編集・刊行がなされた『開館20周年記念誌』（以下、『記念誌』）がある（福山市人権平和資料館編 2005）。『記念誌』は、「第1章 福山空襲と戦時下の暮らし」、「第2章 知られざる 福山海軍航空隊―飛行場建設から特攻隊出撃まで―」、「第3章 福山の戦争遺跡―石碑は語る命の尊さ―」、「第4章 福山空襲（米軍作戦任務報告書より）」、「第5章 福山空襲遺跡」で構成されている。記念誌の詳細については、実際に読んでいただくとして、ここでは記念誌を参考に、福山地域における主要な戦争遺跡を一覧で挙げておく（表1）。

1896年（明治29）12月1日に広島で創設された「陸軍歩兵第41連隊」は、1908年（明治41）7月20日に福山へ転営した。また、1943年（昭和18）5月18日に開校した逓信省所管の「福山高等航空機乗員養成所」は、1944年（昭和19）3月15日に詫間海軍航空隊の分遣隊となり、翌1945年（昭和20）3月1日に「福山海軍航空隊」として独立した。

先の一覧表からは、戦前の福山地域には、陸・海両軍が置かれるとともに、その関連施設が数多く存在していたことが一目瞭然であり、そうした状況は福山の都市形成や地域社会に大きな影響を与えたことは言うまでもなかろう（布川 2011）。なお、陸軍歩兵第41連隊については、大田祐介によって大部な資料集が刊行されており（大田編 2014）、また「福山陸軍射撃場」と「岩国陸軍燃料廠横島出張所」の戦争遺跡に言及した小文がある（八幡 2015a・2015b）。

その他、広島県西部（安芸地域）における主要な戦争遺跡を紹介した一般書が刊行されている（奥本 2009）。

3. 砲台跡の測量調査

3-1. 測量方法

地形および構造物を計測するために、SfM（多視点ステレオ写真）測量を行った。SfM測量は、ドローン等で撮影したデジタル画像を用いて対象物の3次元モデルを生成する測量方法で、短時間で高精度な地形測量を行うことができる。近年では考古学分野

表 1 福山地域における主要戦争遺跡一覧

	遺跡名	所在地	分類	関連遺構
1	陸軍歩兵第 41 連隊 (福山兵営)	福山市緑町	①政治・行政関係	門跡 (将校集会所通用門・練兵場西門), 記念碑
2	歩兵第 41 連隊元福山陸軍練兵場	福山市緑町	②軍事・防衛関係	
3	福山連隊区司令部・福山憲兵隊分隊	福山市昭和町	①政治・行政関係	門標石の残る門柱
4	福山陸軍病院	福山市花園町	①政治・行政関係	門柱, 石垣, 記念碑
5	福山軍用水道	福山市古野上町	①政治・行政関係	
6	福山陸軍墓地	福山市草戸町	⑥埋葬関係	境界石
7	福山陸軍作業所	福山市西深津町	③生産関係	境界石
8	福山陸軍練兵場	福山市西深津町	②軍事・防衛関係	境界石
9	福山陸軍射撃場	福山市北本庄町	②軍事・防衛関係	境界石
10	海後山高射砲陣地	福山市沼隈町	②軍事・防衛関係	台座
11	岩国陸軍燃料廠横島出張所	福山市内海町	③生産関係	埠頭, 待避壕, 監視所, 貯油槽, 貯油槽防空用銃座
12	福山海軍航空隊	福山市鋼管町・大門町	①政治・行政関係	待避壕, 塋道式火工兵器庫, 門柱, 無線室 (壕), 疎開予定壕
13	昭和五年陸軍特別大演習御統監地	福山市御幸町	②軍事・防衛関係	記念碑, 御召列車臨時停留所跡
14	仙酔島高射砲陣地	福山市鞆町	②軍事・防衛関係	造成面, 石積, 凹地

でも活用が進み, 土器や銅鏡など出土物の 3 次元モデル生成や石室の測量などに用いられている (中尾編 2024ほか)。

大量の写真データから 3 次元モデルを生成する SfM 測量では, 緯度・経度・標高が既知である標定点 (GCP) を写し込むことが必要となる。これらの点が 3 次元モデルの基準となるので, 標定点の位置を正確に測定することは SfM 測量の手順のなかで極めて重要である。

本調査では, 測量範囲 (南北約 30m, 東西約 20m) に 15箇所の GCP (基準点) を設置し, DGPS 測量によって位置座標を決定した。DGPS 測量には DG-PRO1RWS (ビズステーション株式会社) を 2 台使用し, 1 台を固定局として鞆町の渡船乗場駐車場に設置し, もう 1 台を移動局として使用して, ネットワークの P2P 通信を介して RTK 方式の測量を行った。なお, 機器に表示された推定誤差は, 2cm 以内であった。

また, SfM 測量に用いる写真撮影に先立ち, 地表面を覆う樹木の伐採を行った。そうした下準備の後, SfM 測量に用いるデジタル写真を撮影した。撮影に

はミラーレス一眼カメラを用い, 4 m のポール先端部にカメラを取り付け, スマートフォンからのシャッター操作によって, 上からの写真を撮影した。樹木の枝によって上から撮影できない箇所では, カメラの高さを下げ, 地表に近い位置から撮影を行った。

3 次元モデルの生成には, Metashape Pro Ver.2.0.3 (Agisoft) を用いた。GCP の計算上の誤差の平均値は 3.5cm であった。この誤差は, 直径 2 ~ 4m である測量対象を計測するのに十分小さいと判断される。得られた 3 次元モデルから 1 cm メッシュの DEM (数値標高モデル) を生成し, 地形図を作成した。

3-2. 測量結果

3 次元モデルから得られた DEM に基づく等高線図, および陰影図を示す (図 2)。調査地である鳥ノ口岬は仙酔島の南東側に突き出しており, 岬の先端へ伸びる緩やかな尾根の上に遺構が並んでいる。調査範囲のうち最も高い位置に平坦面があり, 現在は東屋 (休憩所) が設置されている。その西側には, 直径約 2 m, 深さ約 1 m の円形の遺構が残されている (図 2 中の B)。この遺構は石積みで構築されているが,

一部は崩壊している。

休憩所の下側には扇状に平坦面が広がっており、遊歩道が設置されている。この平坦面上に、直径約3～4mの凹地（円形遺構）が等間隔に4箇所並んでいる（図2）。本研究では、これらの遺構を北からA1、A2、A3、A4と呼称する。円弧の半径は約16.6mで、この円弧上に、円の中心から約45°の間隔で遺構が配置されている。また、円の中心付近には、遺構Bが配置されている（図3）。このように、遺構は極めて幾何学的に配置されており、周到な測量と配置計画のもとで建設されたと考えられる。なお、砲座が並ぶ円弧は南西方向を向いている。

遺構A1～A4の形状には、共通した特徴がある。遺構は円形で外周が盛り上がっており、内側は外周よりも約20～50cm程度低い皿のような形状を呈する。A1～A4の断面図を示すと（図4）、A1は凹んだ窪んだ地形が明瞭に残っており、外周の凸部

と内側の凹部との高低差は約50cmである。A2はやや形状が不明瞭であるが、A1と同様、凸部と凹部の高低差は約50cmである。A3は形状が不明瞭であるが、円形の形状自体は残されている。凸部と凹部の高低差は約20cmである。A4は他の3地点と比べると、直径がやや小さく約3mであるが、凸部と凹部の差は明瞭で、約30cmの高低差がある。以上のようにA1～A4では、程度の違いはあるものの、明瞭な円形の形状、外周の凸部、内側の凹部という地形的特徴が共通している。

3-3. 高射砲陣地の構造

高射砲陣地築設要領によると、高射砲陣地は砲座を円形に12門、あるいは半円形（扇形）に6門配置し、円の中心付近に指揮所を置く構造が基本形とされる（参謀本部 1943）。本調査地の円形遺構（A1～A4）については、遺構Bを中心として放射状に

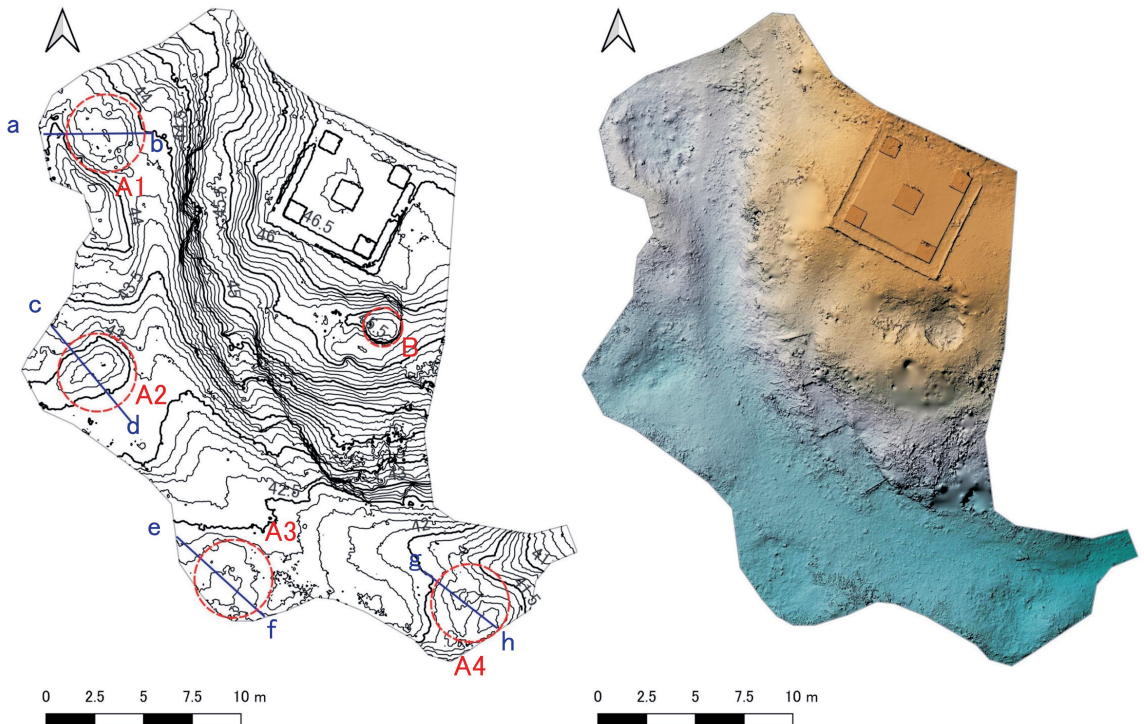


図2 仙酔島高射砲台跡の測量結果 左：等高線図（等高線間隔0.1m） 右：陰影図
※等高線図中の直線は、断面図（図4）の位置を表す。

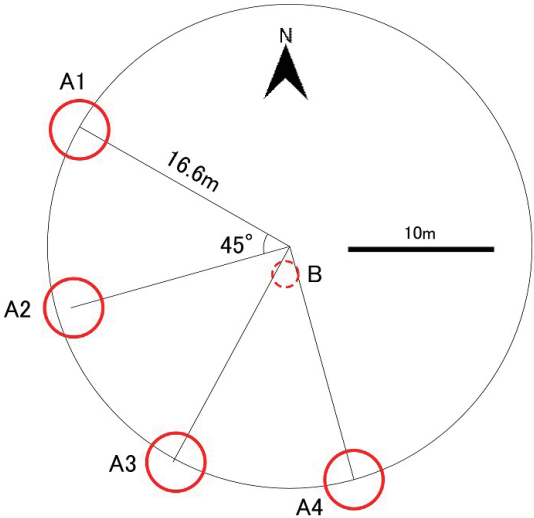


図3 高射砲台と考えられる遺構の配置（推定）

※円形遺構は半径16.6mの円弧上に配置され、砲台間の中心点からの角度は約45°開き、中心点付近にBが存在する。

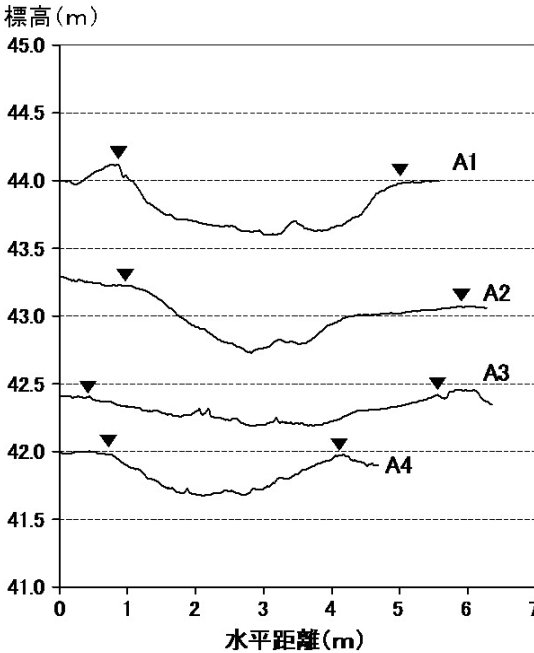


図4 A1～A4遺構の断面図

※▼は地形から判別される外周の位置を表す。

配置されており、高射砲陣地施設要領に示された構造と極めてよく似ている。こうしたことから、本調査地には高射砲を設置するための台座が並んでいて可能性が極めて高いと考えられる。

円形の石積が残る遺構Bは、円弧の中心点付近に配置されている。先の高射砲陣地施設要領によると、砲座は円弧の中心付近には、指揮所や算定具など、指揮命令系統や敵機観測に関連する施設が置かれている。遺構Bについては、こうした用途に使われたものと考えられるが、詳細は不明である。また、地形的に東屋（休憩所）が設置されている平坦面にも、何らかの関連施設が置かれていたものと考えられる。

4. 聞き取り調査

聞き取り調査では、前掲の後藤三雄氏における手記を参照として、鞆町の高齢者が仙酔島における高射砲陣地に関して、直接・間接にかかわらず、何か見聞きするなどの情報を有していないかどうかを明らかにするため、鞆町の住民に聞き取り調査を実施した。

調査対象者は、鞆町の町内会関係者に連絡を取り、高齢者が集まる会に参加して情報提供者を募った。その結果、70歳代から80歳代の住民5人からお話を聞くことができた（表2）。

聞き取り調査は、計3回実施した。第1回目は、鞆町における高射砲陣地と軍関係の施設について、2023年8月22日（水）に鞆町の世話役AさんとBさんの2人に話を伺った。第2回目は2024年4月3日（水）に、1994年頃まで仙酔島で暮らしていたCさんに話を伺った。さらに、2024年8月12日（月）には仙酔島と鞆町に詳しいDさんとEさんへの聞き取りを実施した。調査をする上で、調査目的とその内容、及びインタビューをICレコーダーで録

表2 調査対象者

対象者	年齢	性別	備考
Aさん	80歳代	男性	鞆町の世話役
Bさん	70歳代	男性	鞆町の世話役
Cさん	74歳	男性	仙酔島の元住民
Dさん	81歳	女性	鞆町住民
Eさん	78歳	男性	鞆町住民

音することについて説明を行い、5名全員からインタビューのICレコーダー録音の承諾を得た。調査は約1時間から2時間費やし、①高射砲陣地に関する情報、②仙酔島の地形や特徴的な場所についての確認、③仙酔島と軍に関する情報の3点を中心に聞き取りを行った。ICレコーダーで録音した内容は、逐語録データとして活用し、高射砲陣地に関する情報、仙酔島の地形と特徴、そして仙酔島と軍に関する語りの内容と、今回フィールドで高射砲陣地跡と推定した地形を検証した。

先に結果を述べると、鞆町に住む地域の歴史に詳しい高齢者5名へのインタビュー調査では、仙酔島に住んでいたCさんから、仙酔島に高射砲陣地が存在したという情報を得ることができた。加えて、その砲台跡が今回地形測量を実施した地点であるということも確認することができた。

仙酔島にあったとされる砲台跡は、Cさん以外は、「知らないなあ」「聞いたことがない」との返答であった。最高年齢82歳のDさんは、小学生の頃「仙酔島に泳ぎに行ったが、上の方までは歩いて登らなかった」と語り、仙酔島の高射砲台については初耳であったという。また、Eさんも「仙酔には夏に遊びに行ったけど、よっぽど歴史やら登山が好きなものしか、上（鳥ノ口の展望台）には行かんもんなあ」と語った。

鞆町にあったとされる高射砲台について、Aさん、Bさんは「皿山に高射砲台跡があると聞いたことがある」と語り、Eさんは「阿伏兎に行く山にある、高射砲台跡を見たことがある」と語った。また、Eさんは子どもの頃、平町から能登原の阿伏兎観音で行われる祭りに歩いて行く途中、「ここにあったけえ」と高射砲台の跡を親に教えてもらったという。

今回の聞き取り調査では、Cさん以外の鞆町住民は、高射砲台が鞆町の西の外れに位置する後山にあったと証言が得られたものの、仙酔島の高射砲陣地については「聞いたことがない」と語った。ちなみに、福山市沼隈町能登原の海後山^{かいご}には、高射砲陣地跡とされるコンクリート製の台座が遺存している（図5）。

高射砲陣地の機密性は極めて高く、戦時中はもち

ろんのこと、戦後も仙酔島の高射砲陣地の存在はCさん以外の住民には、認知されていないものと考えられる。

さて、仙酔島の高射砲陣地に関しては、仙酔島の小松浦に1994年まで居住していたCさんの聞き取りで明らかになった。Cさんはおじさんとおばさんから、鳥ノ口展望台について「親父が20歳の時か、24歳の時に亡くなって、その後に何かの時に昔の話をしよる頃に、ぼつりぼつりと（高射砲台について）聞いたことがあるんです。」と、終戦の間際に高射砲台が設置されたことを伝え聞いていると語った。

Cさんの記憶によると、仙酔島に住んでいた当時の鳥ノ口展望台には、現在のような立派なものではないが休憩小屋があり、さらにその下には穴があったという。そして、「あと、何か、どうなんか詳しくはよくわからないのですが、あそこに、今、言われた高射砲台があったとか、何かというような話を聞いた記憶があるようです。ただいつごろのことかわからないけど、あったとしても、もう（昭和）20年の戦争の終わりごろにできたんじゃないかと思います。どちらの家に被害とかあんな何もなかったけど、要は、あれがあったら攻撃されるよ。どんどん撃ったら、あったとしても本当の監視所だったのか、照明塔だったのか、本当の砲台だったのか、たぶん戦争末期だったらそんな立派な大きなあれはないと思う。あったとしたら、あれだ、B29か、あれに届か



図5 海後山高射砲陣地跡（福山市沼隈町能登原）

※画像提供：福山市文化振興課

んような小さい、あれ（砲台）なんかもわからないよね。」と語った。また、高射砲台の跡については、「今僕らがいたときには、円形の形、かなり葉っぱが埋まっていた。当時は割とあれですから、もっとくぼみのはっきり、どのくらいなんだろう。今はかなり埋もれて、子どもが入ったら危ないよ。危ないぐらいの高さはあった。最大のこれぐらいだよ。1メートルはあったんだけどね……、いずれにせよその場所にあったのはほんとだと言っていいです。」と、仙酔島にある高射砲台陣地の場所をはっきりと断定された。

Cさんの「円形の形」、「子供が入ったら危ないぐらいの高さ」、「1メートルはあった」という証言と、今回の測量調査で明らかになった直径約2mの円形遺構（遺構B）の形状がおおよそ一致する。

さらに、高射砲陣地跡までの山道についても、「かなり道自体が広い。彦浦から上がる道は荷車が通すのに広いんだって聞いてた。だから、うちの家からずっと一周する道があるんだけど、あれはもうこんな道、軍事的なあれで割と広い。」との証言を得た。

現在、高射砲台跡とされる「鳥ノ口岬展望台」へと通じる遊歩道は道幅が約1.5mあり、Cさんの語りから推測すると、砲台跡下の海浜から重機等を運びこむために、戦争末期に作られた軍用道路である可能性が高いものといえよう。

5. おわりにー成果と課題ー

今回の一連の調査（資料・聞き取り・測量）の結果、仙酔島の鳥ノ口岬に高射砲台陣地が存在していたことが判明した。以下に、その成果をまとめておく。

文献史料①（平和祈念事業特別基金編 1992）の記述より、高射砲陣地が設置された時期は、1944年11月24日の東京大空襲から、陸軍特殊船「吉備津丸」の修理が完了した1945年7月までの期間であると比定される。また、文献史料②（福山空襲を記録する会編 1985）には、1945年8月8日の福山空襲の際には飛来したB29へ向けて砲撃したことが記述されており、同年8月には運用されていたと考えられる。聞き取り調査では、Cさんから「戦争の終わりがらにできたのではないかなと思う。」との証言があ

るが、比定された設置時期と矛盾しない。

高射砲台陣地には、高射砲を設置した台座跡とみられる円形構造物が4カ所（A1～A4）確認できた。これらの構造物はいずれも直径が約3～4mで、円形の土塁のような盛り上がりが外周を囲み、その内側は皿のようにくぼんでいる。台座と考えられる円形遺構A1～A4は、石積の遺構B付近を中心とする円弧上に、約45°の間隔で扇形に配置されている。こうした配置は、参謀本部（1943）の「高射砲陣地施設要領」に示された模式的な配置に似ており、これらの構造物が高射砲陣地の跡であることを強く示唆している。また、文献史料①にある後藤氏の「ダイナマイトを使って岩を砕いて壕を掘り高射砲四門、測高機、航速測定機、等掩体陣地をつくった」という記述にある高射砲の数と、台座跡と考えられる円形構造物（遺構A1～A4）の数は一致している。

さらに、聞き取り調査の結果も、仙酔島の鳥ノ口岬へ高射砲陣地が存在したことを裏付けるものであった。元島民のCさんからは、現在の鳥ノ口展望台付近に高射砲陣地があったこと、浜から通じる道の幅が広いのは陣地への物資輸送のためであるという証言を得た。

以上のことから、仙酔島鳥ノ口岬には、戦争末期に高射砲陣地が存在していたことは明らかである。しかし、本研究の成果だけでは不明な点も多い。高射砲の台座跡は確認することはできたが、高射砲の具体的な種類を特定することはできなかった。文献史料①（平和祈念事業特別基金編 1992）では、船舶に搭載していた高射砲を流用したことが窺え、そこから船舶でも使用された八八式七糎野戦高射砲が想起されるが、そのことを示す具体的な証拠は得られていない。今後の発掘調査によって、詳しく解明されることを期待したい。

また、高射砲陣地には弾薬庫や兵舎など陣地を運用する上で必要な施設があるはずであるが、その痕跡を見つけることはできなかった。鳥ノ口岬の陣地は狭いので、あるいは近くの他の場所へ設置されていたのかもしれないが、その探索も今後の課題である。

戦争遺跡は、国内各地にみられるものの、その多くが保存はもちろんのこと、記録さえもなされない

まま消失し、人々の記憶からも忘却されていくといった極めて危機的な状況にある。広島県内にも元宇品（広島市南区）などで高射砲陣地が知られているが、陣地全体が残るものは少ない。他方で、仙酔島高射砲台跡は陣地の地形が残されており、当時の様子を現在に伝える貴重な戦争遺跡であるといえよう。文献史料②にあるように、本高射砲陣地は福山空襲に関連する施設でもある。福山市における平和教育にとって重要な遺跡であり、今後の保存と活用が強く望まれよう。

「付記」

本稿は、2023年度福山市立大学教員研究費（重点）の「福山市の沿岸部に構築された高射砲陣地の構造把握と近代史への位置づけ」（研究代表者：澤田結基，共同研究者：八幡浩二・牧田幸文）の成果の一部である。

また、測量調査、及び本稿を作成するにあたっては、以下の諸氏・諸機関に御高配いただきました。末筆ながら、記して感謝申しあげます（敬称略、五十音順）。片岡明彦，寺地靖仁，藤田綾乃，山田真結，中国四国地方環境事務所，鞆町内会連絡協議会，福山市人権平和資料館，福山市鞆支所，福山市文化振興課，平和祈念展示資料館（総務省委託）。

【参考文献】

- 大田祐介編著（2014）『永遠の四一 歩兵第四一連隊の足跡を訪ねて』株式会社 福山健康舎。
- 奥本 剛（2009）『呉・江田島・広島 戦争遺跡ガイドブック』光人社。
- 公益財団法人 日本離島センター編（2019）『新版 [日本の島ガイド] SHIMADAS（シマダス）』公益財団法人 日本離島センター。
- 十菱駿武・菊池 実編（2002）『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房。
- 参謀本部（1943）『高射砲陣地築設要領』国立公文書館 アジア歴史資料センター Ref. A03032195600。
- 戦争遺跡保存全国ネットワーク編著（2004）『日本の

戦争遺跡』平凡社。

- 當眞嗣一（1984）『戦跡考古学のすすめ』『南島考古だより』第30号，沖縄考古学会。
- 布川 弘（2011）『歩兵四十一連隊の福山転営と市政施行への動き』『アーカイブスふくやま』第二号，福山市。
- 沼隈町教育委員会編（2004）『沼隈町誌 写真・資料編』沼隈町教育委員会。
- 日本考古学協会沖縄大会実行委員会編（1998）『日本考古学協会1998年度 沖縄大会 資料集』沖縄大会実行委員会事務局。
- 福山空襲を記録する会編（1985）『続 福山空襲の記録』福山空襲を記録する会。
- 福山市人権平和資料館編（2005）『福山市人権平和資料館開館20周年記念誌 平和を求めて』福山市人権平和資料館。
- 平和祈念事業特別基金編（1992）『平和の礎 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅱ』平和祈念事業特別基金。
- 八幡浩二（2015a）『福山市立大学北本庄キャンパスに残る戦争遺跡』『みよし風土記の丘』No.92，みよし風土記の丘友の会。
- 八幡浩二（2015b）『瀬戸内沿岸部・島嶼部における戦争遺跡の実態調査』『公益財団法人 福武財団 助成活動アニュアルレポート2015』公益財団法人 福武財団。

Initial research of Anti-aircraft battery site in Sensui-jima Island

Yuki SAWADA, Koji YAHATA, Yukifumi MAKITA

Abstract

Tomonoura in Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, is widely known in Japan and abroad for its history, culture and tourism. Sensui-jima Island, just beside Tomonoura, is an excellent natural scenic spot in the Seto Inland Sea National Park. Although Sensui-jima Island is known for its scenic beauty, post-war memoirs and interviews have revealed another kind of history. Recently, it was discovered an anti-aircraft battery was installed there at the end of the Asia-Pacific War. However, until now, the details and specific locations of the installations were not known.

A field survey was carried out and confirmed traces of foundational surfaces of several anti-aircraft batteries and their related facilities. Therefore, a complete topographic survey was then conducted on the site.

Also, a local person who lived on the island was interviewed and provided valuable information. According to the inhabitant, the batteries were located in the exact area where our survey was carried out. It can be said that the remains of the battery on Sensui-jima Island have been identified for the time being. However, there are still many unknown factors, and more archaeological investigation is needed. In this paper, the built-up surfaces and traces detected are tentatively called "Sensui-jima Island Anti-aircraft Battery Site".

Keywords : Tomo-cho Fukuyama city Hiroshima prefecture, Sensui-jima Island, War remain , Battery site, Land survey, Interview

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1702

図 版

図版 1



a . 仙酔島砲台跡近景（調査前）



b . 清掃作業風景

図版 2



a . 測量調査風景①



b . 測量調査風景②

図版 3



a. 造成面（南東側から）



b. 遺構 A 1（凹地）

図版 4



a . 遺構 A 2 (凹地)



b . 遺構 A 3 (凹地)

図版 5



a . 遺構 A 4 (凹地)



b . 遺構 B (石積)

図版 6



SfM測量の3次元モデルから生成したオルソ画像（平面図）